

星をうたう心で

—— 詩人 尹東柱の信仰と平和への思い

司祭 ヨハネ 井田 泉

2025年12月14日
日本聖公会奈良基督教会礼拝堂

第1部

本日はよくおいでくださいました。

今、リコーダーで奏でましたのは、紀元4世紀に遡る古い聖歌です（日本聖公会聖歌集59）。マルティン・ルターがドイツ語で歌詞を付けて広まりました。「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」

クリスマスの前に、わたしたちも救い主を待ち望みたい。とともに、81年前の今ごろ、福岡刑務所の寒い独房で、最後のクリスマスをひとり心にかみしめていたに違いない、ひとりの詩人のことを思います。尹東柱。韓国・朝鮮のクリスチャンです。

1945年2月16日、彼は福岡刑務所で獄死しました。満27歳でした。今年2025年はそれから80年になるということで、同志社大学は彼に名誉文化博士号を贈呈し、また立教大学はキャンパス内に尹東柱記念碑を建てました。尹東柱が20代の半ばに日本に来て、最初立教大学で学び、その後同志社大学で学んだからです。わたしはその両方に関わりがあるのですが、それはそれとして、今から彼の生涯のあらましをたどりつつ、彼の残した詩をご一緒に味わっていきましょう。

お手許に今日ご紹介する詩の対訳、「尹東柱関連略年表」と地図が表裏1枚になったものがあるかと思います。年表の中でカギ括弧を囲んだものは、今日取り上げる詩の題です。どの詩がどの時代に書かれたものかがわかります。適宜ご参照ください。

尹東柱は1917年12月30日、当時の中華民国の東北部、吉林省の北間島^{ブッカンド}と呼ばれる地方の明東^{ミョンドン}という所で生まれました。今から108年前です。彼の家族一族はもちろん、明東の村のほぼ全員がクリスチャンでした。というのは、彼の曾祖父の代に、朝鮮の東北部咸鏡道^{ハムギョン}から豆満江^{トウマンガン}を渡って集団で移り住んだ。言わばキリスト教開拓村が明東でした。キリスト教信仰と民族独立精神の村。村の中心は教会とキリスト教学校でした。尹東柱は

生後まもなく洗礼を受けました。教派でいうと長老派。プロテスタントの大きな流れの一つです。

すでに朝鮮半島は日本の植民地支配下にありましたが、彼がまだ満 2 歳になる前、朝鮮全土に大規模な独立運動が起こりました。三一運動です。明東は行政的には朝鮮ではなく中国領なのですが住民の多くは朝鮮族で、近くの中心都市である龍井ヨンジョンでも大規模な独立運動が起こり、非暴力の学生・市民に対する日本軍の弾圧で多数の死者、負傷者が出ました。

尹東柱一家はやがて龍井に転居、そこの恩真ウンジン中学校（これもキリスト教の学校）に入学しました。その頃から詩を書きはじめます。やがて彼は故郷を離れて平壤ソンシルの崇実中学校に転校しました。当時平壤は「東洋のエルサレム」と呼ばれるほどキリスト教が盛んでした。崇実是有名なキリスト教学校で、おそらく憧れの学校だったのでしょう。彼が崇実に転入したちょうどその 1935 年 9 月、同じ平壤で朝鮮長老教会の総会が開かれました。その総会記録によれば（「平壤老会報告」）、平壤とその付近の教会の数は約 300 です。

ところがちょうどその頃、キリスト教学校は日本当局から非常な圧迫を受けていました。神社参拝を学校ぐるみで行えという命令です。尹東柱が希望をもって入学した当の崇実中学校は、神社参拝命令に服従せず、マッキューン校長が罷免されるという事態に至りました。尹東柱を含め生徒たちは神社参拝に反対してデモをし、学校は休校になるなど紛糾。ついに尹東柱は他の学友たちとともに自ら退学します。入学してわずか半年。その頃に書かれた詩が「別れ」です。1936 年 3 月 20 日の日付。自筆ノートにはその後「永鉉ヨンヒョン君を」と書かれています。親友だったのでしょうか。尹東柱が、汽車で去って行く友を見送る様子です。

①「別れ」

「別れがあまりにも早い、残念にも」。事実、知り合って、友だちになってわずか半年。「仕事場で会おう」というのは、何か将来を約束したのでしょうか。握手した暖かい手の感触が残っています。涙がまだ乾かないうちに、愛する友を乗せた汽車は、遠ざかり、山裾をめぐって行きます。汽車は、後尾を、生きているようにめぐらせて、やがて見えなくなります。

現実には、やがて尹東柱自身も汽車に乗って、故郷に帰っていくのです。平壤駅から龍井駅まで、何度も乗り換えて、丸一日、20 時間ほどもかかったと言われます。

尹東柱は故郷の中学校に編入しました。翌年 1937 年、日本の朝鮮総督府は「皇国臣民ノ誓詞」を制定して、学校、役所ほか、人の集まる所でこれを斉唱することを強制しました。朝鮮人のすべてを皇国＝天皇の国の忠実な臣民（家来）とするための「皇民化政策」一環です。尹東柱も唱えさせられたことでしょう。

皇国臣民ノ誓詞

我等ハ、皇国臣民ナリ、忠誠以テ君国ニ報ゼム。

我等皇国臣民ハ、互ニ、信愛協力シ以テ団結ヲ固クセム。

我等皇国臣民ハ、忍苦鍛錬、力ヲ養ヒ、以テ皇道ヲ宣揚セム。

天皇の支配する大日本帝国に忠誠を誓わせる内容です。

翌 1938 年 4 月、尹東柱はソウル（当時は京城）の延禧^{ヨニセ}専門学校（延世^{ヨンセ}大学校の前身）文科に入学しました。平壤の崇実と同じく、延禧も有名なキリスト教学校です。日本の圧迫の中でも、入学の頃にはまだ朝鮮語、朝鮮文学を学ぶことができたのです。時代の困難にあっても、尹東柱は大きな希望と期待をもって延禧に入学したことでしょう。入学して 1 か月後の 5 月、彼は「新しい道」という詩を書きました。

②「新しい道」

希望満ちた明るい詩です。けれども彼は、時代の強いてくる圧迫を感じていたに違いありません。川、森、峠……。困難を覚悟しながら、しかししっかりと 나의 길^{ナエ キル}「わたしの道」自分の道を進んで行こうという決意がここには込められています。

ところでこの詩は、イエスが言われた言葉を思い起こさせます。

「だが、わたしは今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない。預言者がエルサレム以外の所で死ぬことは、ありえないからだ。」ルカによる福音書 13:33

イエスが、自分の死を覚悟しながらエルサレムに向かっておられたときの言葉です。

事実、日本による圧迫はさらに深刻となっていました。2 年前、平壤の崇実中学校が神社参拝強要に抵抗して紛糾したとき、尹東柱は自ら退学したことを先ほどお話ししました。あの時は神社参拝は学校に対しての強制でしたが、今や学校だけではなく、キリスト教会そのものに対して激しく襲いかかってきました。神社参拝の強要に屈服するということは、朝鮮の教会、クリスチャンにとって二重の屈辱でした。ひとつは民族的屈辱です。日本と

いう他国に自分たちが支配され、呑み込まれていくという屈辱。もうひとつは、聖書に示された唯一の神のみを礼拝すると誓った自分たちが、別のものを拝まねばならないという信仰的屈辱です。

すでに朝鮮全土に次々と神社が建てられていましたが、その全体を統括するのは京城（当時）に 1925 年に創建された朝鮮神宮です。同じ年、やがて尹東柱の命を奪うことになる治安維持法が制定されています。朝鮮神宮の祭神は天照大神と明治天皇です。朝鮮・韓国は、明治天皇の名によって日本に併合されたのですから、それを拝ませるとするのは朝鮮の人々を精神的に屈服させて、外側だけではなく心の内側までも完全に日本の支配の下に置く、日本の支配に奉仕させる、という皇民化政策の一環でした。

当時の朝鮮の長老教会は、中国東北部いわゆる満州の地域も包括していました。そこも含めて長老派だけで教会の数は約 2000、信徒はおよそ 55 万人、牧師 700 人くらいの規模でした。尹東柱が延禧専門学校に入った年の秋、1938 年 9 月 10 日——「新しい道」の 4 ヶ月後です——朝鮮の長老教会総会は神社参拝を受け入れる決議を行いました。これは自主的に行ったものではなく、警察が事前に出席する議員、代議員を脅迫して、賛成すると約束した者のみ出席を許したものです。

尹東柱は長老教会総会の神社参拝決議を新聞で知っていたでしょう。神社参拝決議の日から 5 日後の 9 月 15 日、彼は「**弟の印象画**」という詩を書きました。当時彼は満 20 歳、弟の尹一柱^{ユンイルジュ}は 10 歳でした。

③「弟の印象画」

「人になる」という弟の答がどうしてそれほど悲しいのでしょうか。すでに中等学校以上では朝鮮語による授業は原則禁止されていました。そのような時代に、人らしい人、自由にものを考え発言し行動できるような人になることができるのか。まだ 10 歳の弟はほとんどわかってはいないだろう。けれども成長するにつれてどんなに苦しみを味わうことになるのか。尹東柱は弟のあどけない言葉に、ほんとうに深い悲しみが込み上げてきたのです。

ここで違う響きの詩をひとつ読んでみましょう。「こおろぎと僕と」。これは「童詩」に分類されるものです。尹東柱はこれまでかなり多くの「童詩」を書いていましたが、その

最後のものです。

④「こおろぎと僕と」

次は「自画像」です。専門学校 2 年生の 9 月。尹東柱満 21 歳です。延禧専門学校時代の成績表が残っています。前の年には「朝鮮語」という科目があつて彼は 100 点満点の成績を収めているのですが、この年からはこの科目は廃止され、「朝（鮮）文学」という科目は成績表にはあるものの点数欄は斜線が引かれています。おそらく朝鮮語、朝鮮文学を学ぶことは日本によって実質的に禁止されたのでしょう。代わりに軍事教練が総督府の命令により必修となりました。そういう時期です。

⑤「自画像」

井戸の中に映る自分を見ます。憎らしく嫌な自分です。けれどもその憎らしい自分がいとおしくなる。青年の、自分に対する思い、矛盾をはらんだ心の揺れを言葉にしています。けれどもその情景が、その表現が、その言葉があまりにも美しい。

「井戸の中には、月が明るく、雲が流れ、天が広がり、真っ青な風が吹き、秋があり、追憶のように、男がいます。」

彼が福岡で獄死するのはおよそ 5 年半後です。故郷の龍井で行われた葬儀では、この「自画像」と先ほどの「新しい道」が朗読されたそうです。

延禧専門学校はキリスト教の学校で、「聖書」科目が必修だったようです。尹東柱は長老派の信徒ですが、メソジスト教会の礼拝に通い、聖書クラスにも参加していました。さて彼は 4 年生、最終学年を迎えました。彼は卒業後どう生きていくかをずっと考え悩んでいたでしょう。この時期、リルケ、ヴァレリー、フランシス・ジャム、アンドレ・ジッドなどを熱心に読んでいたそうです。そしておそらく、彼に決定的な影響を与えたのはデンマークのキリスト教思想家キルケゴールだったとわたしは思います。キルケゴールは 22 歳の時、日記にこう書いています。

「根本的なことは、私にとって真理であるような真理を見出すことである。そのためなら私がいつでも生きかつ死ぬことができるようなその理念を見出すことである。いわゆる客観的な真理などを発見したところで、それが私にとって何の役にたつというのだろ

うか」(『死に至る病』岩波文庫、訳者解説から)

わたしは 23 歳の尹東柱がこのような思いで真理を求めていたと想像します。想像というより確信します。彼はこの時期、信仰の懐疑に苦しんでいたようです。幼い頃から素朴に持ち続けていた神への信仰が揺らぐ。見えなくなる。これは恐ろしいほどに苦しい。それはわたし自身、身に覚えがあるのです。必死で真理を求め、神を求める。そうした中で書かれたのが「十字架」です。

⑥「十字架」

「追いかけてきた日の光が／いま 教会堂の尖端／十字架にかかりました。」

ちょうど今、日の光がこの礼拝堂の西側の窓を照らしています。

イエスを追って生きようとしてきたけれども、とてもイエスのような厳しい生き方は自分にはできない。それで彼は、教会の鐘の音が聞こえてこないようなところまで離れて行って、もっと楽な生き方をしようと、口笛でも吹きつつ、さまよい歩きます。けれどもそうすればするほど、あのイエスが気になる。十字架に死んだイエスが自分を捕らえて離さない。それで戻って来ます。

そして決意が生まれます。勇ましい決意ではなく、自分にも「十字架が許されるのなら」……。具体的にどうすることがそうなのかはわかりません。けれども尹東柱は、何かもっとも大切なことのために自分の命をささげる決意を記すのです。

しかし、自分にとっての真理の問題、信仰の問題、生きて死ぬことの問題は、一度決意してそれで解決するものではありませんでした。決意したはずの自分が、決意を捨てたというのではないけれども、生きた人間としてやはり迷いを抱えるのです。「十字架」から4ヵ月後に書かれた「道」を読んでみましょう。

⑦「道」

自分は何なのか。自分が生きて存在することに意味があるのか。どこにほんとうの自分の道が、自分の使命があるのか。苦しみつつ、探し求めて、道を歩いて行きます。

第2部

今うたっていたのは、韓国の讃頌歌（讃美歌・聖歌にあたる）からの2曲です。

最初のは「シオンの栄光が輝く朝」で始まる歌です（讃頌歌 550、讃美歌 216）。暗かったこの地が次第に明るくなっていく。悲しみと痛みは喜びとなり、シオンの栄光が輝く。

これは、尹東柱の竹馬の友、文益煥牧師が1970年代、民主化運動のリーダーとして捕らえられ、長く獄中にあつたとき、毎朝うたっていたものです。文益煥牧師はたびたび尹東柱のことを口にしました。文益煥はカトリック・プロテスタントの「共同翻訳聖書」の翻訳・編集に携わるのですが、「尹東柱が生きていてくれたらなら助けてくれたらろうに」と言っていたそうです。

もうひとつの「恵みの高き峰」と日本語で歌われる歌ですが、これは日本の統治下の朝鮮の教会でもっとも愛されていた歌のひとつとされています（讃頌歌 491、福音連盟聖歌 589）。とりわけわたしの中では、神社参拝の強制に抵抗して獄死した朱基徹牧師の記憶と結びついているものです。

「険しく高いこの道を、戦いながら進んでいきます。もう一度お祈りしますので、わが主よ、導いてください／わが主よ、わたしの足を支えて、そこに立たせてください。そこは光と愛がいつも満ちています」

この節を韓国語でうたっていました。

さて後半の第2部では、尹東柱の延禧専門学校卒業が迫った時期の詩2編と、翌年日本に渡って立教大学在学中に書いた5編のうち2編、合わせて4編をご紹介します。

第1部の最後に朗読しました「道」からひと月あまりたった1941年11月5日、彼は天を仰ぎつつ「星を数える夜」を書きました。

⑧「星を数える夜」

11月初旬、見上げれば満天の星。星ひとつひとつに名前を付けて呼んでいきます。そして、星ひとつに「어머니」（お母さん）と呼んでみました。そこからは故郷のお母さんへの語りかけになります。星の光の降る丘の上に、彼は自分の名前を書いた。すぐにそれを土で覆ってしまいました。どうしてでしょうか。すぐに答を出さずにあたためておくの
がいいかもしれませぬ。天には星。地には虫の鳴く音が大きく聞こえる。それは「恥ずかしい名を悲しんでいるからです」。虫に託して、尹東柱自身が自分の名を、自分自身を恥

ずかしいと感じて悲しんでいるのでしょうか。心に痛むこと、大切なものを失ったり後悔したりすることがあったのかもしれませんが。

もうひとつ、具体的なことがありました。彼はすでに日本への留学を決めていたと思います。日本渡航を実現するためには、「尹東柱」の名前を変えなければなりません。創氏改名。それは彼だけに留まらず、家族全員が「尹」という伝統ある大切な姓を捨てて、代わりに日本式の「氏」を付けなければならないのです。事実、彼の日本留学のために、家族あるいは一族全員が「平沼」となります。「恥ずかしい名を悲しむ」とは、そのことを含んでいたのかもしれません。

けれどもこの詩は、恥ずかしさと悲しみで終わっていません。

「けれども冬が過ぎて わたしの星にも春が来れば
墓の上に青い芝草が萌え出るように
わたしの名まえの字がうずめられた丘の上にも
誇らしく草が生い茂るでしょう。」

「墓の上に」。彼は自分の死をどこかで覚悟していたのでしょうか。「けれどもわたしの星にも春が来れば……誇らしく草が生い茂るでしょう。」

自分の死の予感あるいは覚悟がここには含まれているかもしれない。しかし同時に春の再生、復活の希望がこめられている気がします。それは自分自身のことであるとともに、いま歴史、言葉、文化を奪われていく民族の復活も、暗示されているように思います。

次は「序詩」です。尹東柱の代表作と言ってもいいかもしれません。元々この詩には題がありませんでした。彼の死後、遺稿となった作品を出版する際に詩集の冒頭に置かれて、最初の詩、扉にあたる詩だから「序詩」と名付けられたもののようです。

⑨「序詩」

この詩にある「하늘 ハヌル」は「空」と「天」の両方の意味を含んでいます。わたしは「天」と訳しました。というのは、この「하늘 ハヌル」は、イエスが「天におられるわたしたちの父よ」と神様と呼ばれた「天」だからです。

詩の冒頭、「死ぬ日まで天を仰ぎ」「죽는 날까지 하늘을 우러러 (ハヌルル ウロロ)」。この「ハヌルル ウロロ」(天を仰ぎ)は、実は韓国の聖書に何度も出てくる言葉なのです。イエスが五つのパンと二匹の魚を受けて天を仰いで祈られた(マルコによる福音書

6:41)。「하늘을 우러러 (ハヌルル ウロロ)」です。イエスが、耳が聞こえず舌が回らない人を前にしてその人の悲しみ苦しみを感じて嘆息しつつ天を仰がれた(マルコ 7:34)。これが「하늘을 우러러 (ハヌルル ウロロ)」です。聖書の言葉、天を仰がれたイエスの姿が尹東柱の心に宿っていて、イエスの祈りが尹東柱の中にこだましていた。それがこの詩に溢れ出た、とわたしには思えます。

木の葉に起こる風にも苦しみが起こるほどに繊細な、また優しい心を持った彼が、「すべての死んでゆくものを愛さなければ」とうたいます。大切なものが失われていく。尊いものが死んでいく。耐えがたい苦しみです。けれどもただ悲しみ苦しむのではありません。こうした中であって、危ういもの、尊いものを愛し守り支えるために、自分に与えられた道を歩んでゆかねば、と願い、決意する。

「わたしに与えられた道を」。この道は先ほどの「新しい道」とつながっている。尹東柱は自分の道にイエスの道を重ねていたのではないのでしょうか。

この詩から 18 日後の 12 月 8 日、日本は真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まりました。戦時下の学制短縮により、彼はその月 12 月 27 日に延禧専門学校を卒業します。

翌 1942 年 1 月、尹東柱は「平沼東柱」^{ひらぬまとうちゅう}となり、3 月に日本に渡り、4 月に立教大学文学部英文科に入学しました。より深く学びたい。学びを深めることによって、滅ぼされつつある朝鮮語、朝鮮文化をいつかは復興させたい、という願いを秘めていたのではないのでしょうか。立教大学に入学したものの、現実にかかる圧迫は厳しいものがありました。入学したとたんに頭は丸刈りにさせられました。学内は配属将校が幅を利かせており、文学部を「文弱部」と言って罵倒していました。しかも尹東柱は軍事教練を拒否して参加しなかったため、いっそう厳しい目に遭わされたようです。

⑩「たやすく書かれた詩」

「ひとの国」「闇」。彼の外的内的状況を示す言葉です。いつ自分は最後を迎えるかもしれない。けれども、希望のあかりをともして、新しく来る朝を待っています。握手しようにもここには相手がない。だから「わたしはわたしに 小さな手を差し出して、涙と慰めで握る最初の握手」をする。しかし、「最後の握手」ではなく「最初の握手」と言っているところに希望があります。いつかは、今握手することができない人たちとも、握手する

日が来るかもしれない。

しかし尹東柱は東京での生活に限界を感じたのでしょうか。秋には京都の同志社大学に移りました。ここで気づくのですが、彼が学んできた学校は、最初の明東小学校から始まって、平壤の崇実中学校、ソウルの延禧専門学校、立教大学、同志社大学と、ほとんどキリスト教学校です。同志社の英文科に学んで年を越し、1943年5月には学友と宇治に遠足に行きました。ところがずっと彼は特高の監視下に置かれていました。故郷に帰省する準備を整えていた7月14日、突然、下鴨署の特高が彼の下宿に踏み込んできて彼は逮捕されました。彼は連日取調べを受けました。おそらくひどい拷問も受けたでしょう。京都時代に書いたはずの詩は、すべて押収され、失われてしまいました。翌1944年3月31日、京都地方裁判所は尹東柱に対して懲役2年の判決を下しました。治安維持法違反。大日本帝国の國體（国家のあり方と秩序）に背き、独立運動をした、というのが罪状でした。尹東柱はたしかに内には民族独立の願いを抱き、それを親しい同胞の友人と語りあっていたことはあったでしょう。ハングルで詩をノートに書いたでしょう。それが許しがたい犯罪とされたのです。

彼は福岡刑務所の独房に収監されました。ただひと月に1枚だけ、故郷の家族に葉書を書くことが許されていきました。あるとき、彼は英和对訳聖書がほしいと葉書に書き、弟たちがそれを手に入れて送ってくれました。

あるとき弟からの葉書にこう書いてありました。「こおろぎの声にももう秋を感じます。」それに尹東柱はこう返事しました。「きみのこおろぎはひとりでいる僕の監房でも鳴いてくれる。ありがたいことだ」。先ほどの「こおろぎと僕と」を思い出させます。

弟とは、尹東柱が20歳のときに10歳だったあの「弟の印象画」の弟、尹一柱です。

尹東柱はこおろぎの鳴くのを聞きながら、次第に寒くなっていく独房で、英語と日本語で聖書を読んでいた。どんなにかハングルの、朝鮮語の聖書を読みたかったことかと思えます。

福岡刑務所の独房で最後のクリスマスを迎えた彼は、栄養失調と寒さの中で次第に弱っていきました。そして2ヵ月後、福岡刑務所に収監されて1年弱。1945年2月16日、午前3時36分、尹東柱は獄死しました。当時の看守の話によれば、「尹東柱さんは何かわからないけれども大声で叫んで絶命した」とのことです。彼が最後に何を叫んだかは、わかりません。ただ彼の叫びは、イエスの十字架上の叫びとあまりにもつながっているように思えてなりません。イエスは30歳と少し、尹東柱は27歳でした。

先ほど少しお話しした尹東柱の竹馬の友、文益煥牧師は後にこのように述べています。

『彼の抵抗精神は不滅の典型だ』という文を読むごとに、わたしの心はすぐにはうなずけない。彼にあってはすべての対立は解消された。彼の微笑に漂う温かさに溶けない氷はなかった。彼には皆が骨肉の兄弟だった。わたしは確信をもって言うことができる。彼は福岡刑務所で最後の息を引き取りながらも、日本人を思って涙を流しただろうと。彼は人間性の深みを掘り出し、その秘密を知っていたから、誰も憎むことができなかつただろう。彼は民族の新しい朝を願い切望する点では誰にも劣らなかつた。それを彼の抵抗精神と呼ぶのだろう。しかしそれはけっして敵を憎むことではあり得なかつた。少なくとも東柱兄は、そのように感じることはできなかつただろう。』

今、日本で急激に高まっている排外主義とは何と対照的なことでしょうか。

彼を死に追いやったのは大日本帝国の支配に逆らう者を許さない治安維持法でした。この国を、そのような体制にもう一度戻そうとする力が今、強力に働いています。治安維持法のような統制につながる法律が定められ、また準備されつつあります。そのようなことは絶対に許されてはなりません。

「星をうたう心で／すべての死んでゆくものを愛さなければ／そしてわたしに与えられた道を／歩みゆかねば。」（序詩）

尹東柱の生涯と獄死と、残された詩に触れるとき、わたしたちの中にも「すべての死んでゆくものを愛さなければ」、平和を目指して生きなければ、という反響がおこります。

尹東柱はあの「たやすく書かれた詩」のなかで「最初の握手」と言いました。「最後の」ではなく「最初の」と言った。彼はわたしたちに、こうして詩を通して、手を差し出してくれているのではないのでしょうか。わたしたちのほうからも彼に手を差し出したいと思えます。

彼の残された最後の詩、「春」を読みます。

⑪「春」